

1980年から最近まで

19期 高田（旧姓 佐藤）立雄

”使い古しの、すっかり薄く丸くなってしまった石鹸を見て、ちょっと待ってくれという気分になってみたりすることが、多分、誰にでもあるはずだ。” で始まるのはスポーツライター山際淳司氏による「たった一人のオリンピック」。

1980年、日本が出場をボイコットしたモスクワ五輪のシングルスカル代表 津田真男氏の話である。

彼はある日、「オリンピック選手になろう！」と思い立ち、現実には（出場はしなかったが）代表選手になってしまう。

同じ年、私はというと、丸くはなっていないけどブランドのロゴが消えかけたくらいの石鹸ではあったかもしれないが、もちろんオリンピック選手になろうなどとは微塵にも思わなかった。

帰省した折、家族にボート部に入部したことを告げても皆一様に「??？」

かろうじて父は「早慶なんたらか...」

そんな中、明治生まれで若い頃に東京に奉公に出たことがあるという祖母だけが「ボートというのは本当に家柄がよくないとできない。武道や野球とは全くのレベチ。ついに佐藤（旧姓ね）家から選手がでたか...」と涙を流さんばかり喜んでくれた。



戸田合宿(筆者@前列右から2番目)

さすがにこっちが「??？」であるが、可愛がってくれた祖母が喜んでくれるのは嬉しかった。

入部して最初の合宿で「電気工学科は授業に出なくても卒業できる！」と先輩たちに言われ、卒業に必要な最低限のことを教わり、4年間そのとおり実践した。

おかげで成績は散々だったが、卒業はできた。そんな時代だ。

「あの先輩たちのせいで大した会社に就職できなかった」などとは思っていない。「私が卒業できたのは先輩たちのおかげ！」なのだ。



最強(?)フォアクルー(筆者@左端)



第60回 全日本選手権競漕大会
第9回 全日本学生選手権競漕大会
第29回 オックスフォード版レガッタ AJG 82 札幌オリンピックコース

全日本選手権出場!(筆者@バウ)

そんなわけで、成績にも就職にも関心がなく、さらには一年生から同期ですっと「付きフォア」に乗っていたので、三年生の春に「夏の全日本選手権に出たい」と我儘と思いつつも言ってみたら、わりとすんなり出場することになった。私以外は成績も就職も大事だったろうに、と思うと今でも申し訳ないし感謝している。余談だが、「全日本選手権出場!」はビジネスでもプライベートでもかなり効果的ワードなので時々使わせてもらっている。

さすがに四年生の夏には就職課から呼び出しを受ける。「卒業できそうで就職が決まっていない学生が学科で三人いる」と。

他の二人は誰か聞いてみたら、両方とも友人だった。その後三人に妙な緊張感が生まれたが、結局私はブービーで就職が決まった。

北九州のプラント工事会社に入社した。同期入社の技術系はほぼ体育会出身、国立も私立も地方 1.5 流大学が多かった。仕事はというと積算・工事設計・現場監督など、技術的には難しいことはあんまりなくて(海外工事の仕様書は英語で、これには苦労したが)、現場では溶接用のポンペを担ぐ筋力の方が圧倒的に重要だった。体育会系を採用するわけだ。

このためにボート部で体を鍛え筋力をつけたわけではなかったが、現場の仕事を回すにはあって損はなかった。



若い頃(賞金を貰ってニンマリ)

思い出すのは、現役の頃先輩たちから「やってしまえば、おしまいじゃい!」と言われたこと。

これは「それやったら、ダメだよ」ではなく厳しい練習メニューに臨み「さっさと、やらないと終わらないよ」ということ。パワーとスピードを要求されている。

これは「人生の問題の多くは、体力で解決できる」という真理(?)かもしれない。

その後2年弱で転職する。一応全国区で多角化している繊維メーカーであったが、地元で電子部品の工場があったのでUターンした。当時は余剰な工場と比較的低廉な労働力を保有する繊維メーカーが半導体産業に進出することは珍しくなかった。

半導体の実装とかやっていたが、これもやはり体力勝負だった。三交代の昼からのシフトで生産管理や品質管理の仕事をし、深夜は現場で作業、日勤の朝礼・ミーティングをこなして一日が終了。

日本から半導体の仕事が消えていくのに合わせるように、当社も半導体事業から撤退。

(この頃の話は「半導体戦争(CHIP WAR)ダイヤモンド社」が面白いよ♪)

私は東京の本社企画部へ異動しその後15年位経営企画やったり関係会社の管理をした。企画部では経営・事業計画、法律対応、マーケティング、さらにはM&A等々厄介なことも多かったが、そんなことより保守的・前例主義で、決められない・スピード感に欠ける上司・経営への対応に神経を使うのが面倒臭くて、後半の5年位は早く異動したかった。

その後退職まで約10年は関係会社で仕事をする事となった。2社にお世話になったが、農業機械メーカーと消防車メーカーだった。事業環境は厳しかったがそれぞれに充実していた。現場感・ライブ感は体育会系向きである。またこの間25年は単身赴任だったが、まあ、そんな時代だ。



中国にて消防車(はしご車)に乗る

せっかくのポート部への寄稿なので少しは関係した話を、と思うが、卒業後ほとんどポートには縁がない。それでも唯一レアな話を。

2007年に会社の人事教育制度の一環で、海外短期留学の機会があった。

私はアメリカのフィラデルフィアに約2ヶ月、あのトランプ前大統領が卒業したといわれるPENN UNIVERSITY (WHARTON)でAMPというワールドワイドにマネージャークラスを集めたプログラムに参加することになった。

与えられたテーマをグループで議論し取りまとめてプレゼン資料作成とかは夜中までやっているし、その後うんざりするほど厚いテキストを読まなきゃって、全然時間が足りない。

結局朝までかけ、目を通して授業に臨んでも、こっちの英語力も怪しいが、先生は先生で、全く関係のない話を始めたり、あるいは、年寄りで何言っているのかさっぱりわからなかったり... なんて毎日。これも体力で乗り切ってしまうしかないのだ。



海外短期留学(筆者@中段右端)

そんな中で、「丸一日、みんなでエイトに乗ろう！」というカリキュラムが真面目に組まれていた。いわゆる「チーム・ビルディング」の一環なのだろうけど、大学のボートハウスに行き、レクチャー受けて漕いでみて、ランチ食べて、午後はレースの真似事。さすがに8人同時に漕ぐことはできなくて、前4、後ろ4人の交代制。

これが卒業後唯一のボート経験となった。しかも USA で！って、これもいろんなところでネタにしていますが。

さすがに経験者だから岸の現役部員から「どこから来たんだ？」「どこでやってたんだ？」と声がかかる。

私の脳内は「戸田？ 埼玉？ 日本？」で結局「TOKYO JAPAN!」... 微妙なお答えしかできなかった。

そんなことで一日過ごしたが、やはりヘトヘト。私だけひとり、真面目に力いっぱい漕いでたんでしょね。懐かしくて楽しかった。

さて現在の話。

地元で2度目のUターン。仕事はしているものの、月15日。

コロナも落ち着き、最近は古い友人からのお誘いも増えている。高校の同窓会などは比較的積極的に参加し、会社関係も同様。

これからは理工ボート部の行事にも参加させていただきたいと思います。新歓・納会とか自分が現役の頃を思い出しますね。

ゆるい時代を背景に「どこで何をしても基本的には楽しい」という性格と「やってしまえば、おしまいじゃい！」という人生の真理とでなんとなくやってきた感が強い。

そこには冒頭のオリンピックを目指す選手のような強い意志も勤勉さも、自身に対する

厳しい分析も将来への洞察もない（未読の方は、山際淳司「たった一人のオリンピック」をどうぞ。Kindle unlimited なら¥0）。

現役のみなさんの今後の人生には全く参考にならない話で終始しましたが、私は昔を思い出し、大いに楽しませていただきました。ありがとうございました。



最近の筆者

注) 本稿の「先輩たち」というのはOBOG 会長「下遠野さん」と読み替えて頂いて構いません。